

#### 四十四、無題

大經云。設有大火充滿三千大千世界、要當過此聞是教法、歡喜信樂、受持誦誦、如說修行、所以者何。多有菩薩、欲聞此經而不能得。若有衆生聞此經者、於無上道終不退轉。是故應當專心信受持誦說行。

無量壽經にはここに掲げた「世界に満てらん火をも過ぎて法を聞け」との厳肅な勸誡が二度出ている。一つは、今出したところの、世尊が弥勒菩薩への付属の文であり、今一つは、東方偈の最後に出ているところの、

「設ひ世界に満てらん火をも 必ず過ぎて要めて法を聞かば  
会ず当に仏道を成じ 広く生死の流を濟ふべし。」

という御文である。これは十方恒沙の仏国における、諸仏がその国の菩薩に対してなされる説法であるから、三千大千世界に満てらん火をも過ぎて、要ずこの經法を聞けとの勸誡は、諸仏世尊の同一のみ意である。

人はただ忠実に教えを聞かなければならない。聞く教えが真実でなくても、聞く心が如実でなくても、真実に道に生かされることはできない。教えが、虚偽でないまでも、権仮の教えであるならば、雑行と言われ、たとい教えは真実であっても、その修する機が如実でないならば、雑修と言われる。されば「如説修行」と言われるのである。

人生における真実の生活は、ただ、真実教を聞信して、如実に修行するところのみ開ける。されば、必ず真実の教えを聞かねばならぬ。これ出世の一大事因縁である。

「信」の一字、浄土の法門の金的であり、肝要であり、生命であり、そのすべてである。久遠より永遠に現行したもう常住の大道が、衆生の胸中において、廻向し顕現したもうかぎりを称して、信樂というのである。されば信樂は、如来本願と一体なるがゆえに、ただちに、大心海と言われ、信心海と呼ばれ、本願海と称えられ、大悲海、大智海、智願海と讃えられるのである。これ、普遍常恒の南無阿弥陀仏の大道が、衆生の疑惑、無明、虚仮不実を全否定しつつ衆生の上に、不滅の大自然を成就せる相である。如実修行とは、信心一つのことである。

信心とは、全我の満足であり、全人的自覚であるがゆえに、大慶喜心と言われ、歡喜信樂と言われる。されば、鸞師は「能滿衆生一切志願」と言われた。浄土往生の一願満足することは、一切志願の満足を得ることである。もし往生浄土一願の満足が、一切志願の満足でないならば、その信心は如実ではない。信は全人格の事実であり、全一なる自覚である。

蓮如上人は「仏法には身を捨てて望み求むる心より信をば得ることなり。」と仰せられた。

「身を捨てて望み求むる心」とは三千大千世界に満ちる火をも過ぎて求めよの仰せを受け取った心である。魂を打込んで御法を聞け。全我を挙げ、身を捨てて求めたものだけが汝のものである。強い強い声が私を打つてくださる。

人もし大法に全我を挙げて奉行せずば、必ず五欲の虜となつて、つまらぬものにひき廻されて一生を空しく費すであらう。大法に終始する人のみ、大法を聞信する信心歓喜の中に、光あり、喜びあり、慰安あり、力あり、満足あり、道ありて、外に慰労と褒美とを求めなくてもすむであらう。真実の明朗は、ただ大法の中にのみあり。されば、身を捨てて求むべきは、ただ大法のみである。

「命をさし上げます」と言う人にして、金は十銭でも出すまいとする人がある。あるいはまた、金なら出しますが、命まではと言う人がある。金を使い、努力を使えば、それを名利にかえなければ承知しない人がある。その心をもつて、大法の庭に来るのは、大法をさえ名利の具にするであらう。名利の人にしてついに、全我を打ち込んで一道を行歩することを聞かず。命を捧ぐと言うも一片の感情にすぎず、巨万の富を出すと言うも、全我の事実にあらざる時、その心中深くさぐれば、名利の心あり。我の執着あるにすぎず、大法を受け取らず、信樂全我の事実とならぬためである。

大法によつて死に得る者のみ、大法によつて生き得るのである。

国家のために死に得る者のみ、国家のために生き得るのである。

人は死地に死に得べし。時に緩急に當つてば、あるいは易々として死に得るであらう。しかし、平常の生にあつて、この死を生の中に一貫するものは、希有であらう。2  
死の覚悟が一旦の興奮でなく、死の覚悟が一生を貫いて、そのまま生の覚悟であり得る者だけが、一貫の巨歩を残すであらう。一旦の死を五十年に引き延ばすところに徹底した生活がある。

如来第十八願の世界とは、如来心が、衆生の心の底に洞徹直入、清浄功德そのままの自信心を成就し、微塵の自力の垢を混雑せざる仏凡一体、機法一体の世界のことである。本願の真実をおいてほかに、もつて生命とするものなく、光明摂取その全我を奪い、本願大悲その全我を燃焼せしめ、行住坐臥、念仏の中に呼吸するもの、すなわち第十八願の行者である。三千大千世界に満てらん火をも過ぎゆきて、仏の名号を聞くとは、実にかくのごとき、第十八願の世界に入らしめんがためである。かくのごとき人は、無我の大精神に生きるがゆえに、真に死に得るのである。真に死に得るがゆえに、真に生き得るのである。

そのことのために死に得るとは、そのことのために、身を惜しまず、心身を勞することである。仏法のために生き、大法のために死するとは、大法の恩徳に報謝して、粉骨碎身の勞に生きて、しかも勞を勞とせざることである。

そこにのみ、「若有衆生聞此經者、於無上道終不退轉」と、不退轉の大道を顕現するのである。

「一。蓮如上人、細々御兄弟衆等に御足を御見せ候。御草履の緒くひ入りきらりと御入り候。斯様に京田舎、御自身は御辛勞候うて仏法を仰せひらかれ候由仰せられ候ひしと云々。」(『御一代記聞書』)

これ大法のために全我を打ち込みたまひし上人のご一生の象徴である。生と死と、一切を本願の大船に乗托して、念仏の光懷に托しきるもののみ、一切生活を、本願の大信に統融せられて、淳一相続の足跡を、生死界に印するてあろう。

われらが歩みをして、内に向かわしめよ。一人一人内に歩むべし。一支部、一支部内に歩むべし。一切の悪魔陣を内に大法によつて攻略せられて、ついに全一なる大信に至る時、そこに無我、真実の清浄なる一心の境あり。これぞ、過去、現在、未来三世一貫の広大無碍の金剛心、不滅の浄火、道元功德の母、大和柔軟の心、一切の徳を撰在せしめたる、永遠の無上道心である。人も、社会も、国家も、すべてこれによつて出發すべきである。国土の野にこの心ありて、上、大御心に向かい奉るべきである。されば同胞よ、一心に大法を求めて、自信教人信の一道に生きん。